いまキューバが熱い

～革命による社会主義国家建設を考える～

エッセイスト　近藤　節夫

１．社会主義国家への歩み

このほどカリブ海の小島キューバを訪れる機会があった。キューバはかねてより最も訪れてみたいと望んでいた国のひとつで、東西対立の最中に世界中に大きな衝撃を与えたキューバ革命の息吹に触れ、その成功の要因を現地で探ってみたいという思いがいつも頭から離れなかった。

キューバ革命と言えば、ともすると「社会主義革命」というカテゴリーで一括りにされがちである。現実のキューバ革命国家の実態は、後年になり社会主義体制の仕組みが国内の隅々に定着してきたが、当初は思想的にも、その実態もまだ中途半端な革命国家だった。実際革命の指導者フィデル・カストロは当初共産主義に傾倒していたわけではなかった。社会主義国家の盟主だったソ連にとっても、キューバがアメリカの資本主義支配圏から脱したとは言え、果たして社会主義国家たり得るかという点では甚だ懐疑的だった。キューバは革命を成し遂げ社会主義国家へ一歩踏み出しながらも、当初は理論的にも実践的にもマルクス・レーニン主義をイデオロギーとする社会主義国家からはまだ程遠いものだった。キューバ革命政権が目指したのは、端的に言ってソ連のような大国的社会主義国家とは異なり、マルクス・エンゲルスの理想に近い独自のキューバ式社会主義国家建設だった。小国キューバにとっては、それこそが身の丈に合うものだと考えていた。革命後、キューバは試行錯誤を繰り返しながらも、１９６１年５月社会主義革命を宣言した。

キューバ（成美堂出版世界地図より部分転載）

一言でキューバ革命後における革命成就の影響と効果を表すなら、理念とその方向性は佳しとしても前途は未だ道半ばである。しかし、着実にその成果が得られていることは、国の随所で有形無形の形で確認することができる。そして、カストロ兄弟やチェ・ゲバラら偉大な革命家たちがキューバ国民から今も深く敬愛されていることは疑いようもない。今日彼ら革命の志士たちは、キューバにとってもキューバ国民にとってもかけがえのない存在なのである。

旧ソ連はロシア革命後マルクス・レーニン主義をテーゼとしながらも、その実態は黎明期には残虐な大量虐殺を行ったり、国民の声をほとんど無

視して絶対的な権力集中により、国民貧困層の救済、貧富格差の解消など為すべき社会主義政策に直ぐには着手せず、むしろ国民各層から夢を奪っていた。かつてのソ連やロシアの社会主義的手法は、キューバの革命政権の理念とは合致するものではなく、その点では明らかに一線を画するものであった。

キューバ革命を主導したカストロ（右）とゲバラ

小国キューバがソ連や他の社会主義国からも、また国内外の共産党や社会主義団体からの支援も受けずに自らの力で成し遂げた革命は、国民にとって極めて誇り高いものであり、いかなる国も真似のできないキューバならではの唯一無二の社会主義革命である。その意味でもキューバ革命は、際立って特異で純粋な革命であり、ベトナムやアルジェリアなど一部のアジア・アフリカ諸国が成し遂げた地域社会主義革命とも異なり、多くのキューバ国民がひとりのアルゼンチン人の手を借りて成し遂げたキューバ独自の社会主義革命である。

しかし、キューバにとって革命後の道のりは決して平坦なものではなかった。国内外に多くの難題を抱えた発展の歩みは、遅々としている。それでもなお理想的な社会主義国家建設へ向けて歩みを止めることなく着実に前へ進んでいる。

理想的な国造りのために身を賭して革命を成し遂げ、その立役者となったフィデル、ラウルのカストロ兄弟、及び異邦人チェ・ゲバラは、いかにして艱難辛苦を乗り越えてこの革命を成功へ導くことができたのか。彼ら卓越した革命のリーダーたちの強い信念と情熱によって導かれたキューバ革命は、革命後半世紀余を経た今日、いかに国民から評価され、どう思われているのか。その実態を知りたくて、キューバ革命を初めて耳にした時の興奮と驚きを改めて思い起こしながら街を歩き、社会主義国家キューバの今日の姿を追ってみた。

2．キューバ危機に衝撃

学生生活も残すところ僅かとなり卒業論文の仕上げに追われていた1962年10月、冷戦時代の米ソ対立の最中に突然カリブ海でキューバ危機が勃発し、思いも寄らず世界史上の大きなエポックに遭遇した。東西対立の厳しい現実に改めて目を覚まされ、カウンター・パンチを食らったようなショックを受けた。キューバ革命成功からまだ3年も経っていない時だった。

大学キャンパス内では学生たちもこの突然降ってわいたよう

なホット・ニュースに皆大きな衝撃を受け、言い知れぬ不安に駆られた。

アジアではベトナム戦争が日一日と激しさを増し、パレスチナではイスラエルとアラブ諸国の間でテロや局地戦が性懲りもなく繰り返され中東情勢は揺れ動いていた。東西ベルリンの境界線には高いコンクリート製の壁が設置され、東西対立の冷たい現実が目のあたりに突きつけられた。キューバ国内にはソ連のミサイルが設置され、他方アメリカのU２型偵察機がソ連領内で撃墜されパイロットが捕縛されるなど、米ソ両大国の対立にも息詰まるような緊張感が増していた。世界中が冷ややかな緊迫感に捉われ、ひとつ間違えれば、このカリブの海を発火点に、キューバ革命が元の木阿弥になりかねず、はたまた核戦争へ発展し第３次世界大戦が勃発してもおかしくない一触即発のただならぬ危険な状況下にあった。

その２年前、日本国内では国論を二分した60年安保反対闘争がヒートアップしていた。その前年あたりからアカデミックな大学キャンパスには、外部から招いた著名人が入れ代わり立ち代わり登場しては激しい言葉で反対派をなじり、一部保守派の論客は自らの主張を声高に叫んで学生たちに自分たちの正当性を訴え、野次を浴びながら安保反対派に対して攻撃的な論争を仕掛けていた。

エドウィン・ライシャワー米駐日大使、藤山愛一郎外務大臣もキャンパスを訪れ、日米同盟上、また国土防衛のため安保条約の必要性と重要性を力説し、安保条約改定をアピールしていた。その一方で、日米安保条約に反対の浅沼稲次郎・日本社会党委員長や、伊井弥四郎・日本共産党中央委員らもやって来ては、安保条約の無意味さと不合理性、不平等を非難し、米軍事基地恒久化につながる米軍の国内基地駐留に強く反対を訴えた。更に早期沖縄本土復帰を訴え、戦争再発防止のために、安保条約改正反対と同条約廃棄に向けて結束して行動するよう激しい口調で学生たちの気持ちを鼓舞していた。

キャンパス周辺には次第にささくれ立った空気が漂ってきた。大学側の要請と称して大学構内に武装警官隊が入り込み、教室を封鎖して座り込みを続ける学生たちをひとり一人排除し始めた。抵抗を試みた学生らは身柄を拘束され、キャンパス内には穏やかならぬ空気が充満して騒然としてきた。

しかし、安保反対闘争は日本各地で多くの労働者と学生らを巻き込んだ国民的運動となったにも拘わらず、保守多数派の政府自民党は、国会で強行採決を行い日米安保条約は改定された。こうして安保反対運動を行ってきた我々学生は屈辱的な敗北感と挫折感を味わされることになった。結局のところ政府と公権力によって安保反対闘争は抑え込まれ、安倍晋三現首相の祖父・岸信介首相率いる自民党政権とアメリカの思う壺となった。安保反対闘争は次第に衰えて終息し、結局日米安保条約のくびきから逃れたいと願う国民の思いは叶わなかった。しばらくの間キャンパス内は声も出ないほど意気消沈としていた。それは学生時代における大きな挫折となった。

しばらくしてその敗北感から逃れるように我々学生は、新たな目標を定めて安保反対闘争からベトナム反戦運動へその行動の軸足を移して行った。そんな激動の延長戦上で私自身も戦火のベトナムの地へひとり飛び込んで行くことになった。

そんな内外にびりびりする激動の時代に突然思いもかけずキ

ューバ危機が発生し、また新たなショックを受けた。唐突に飛び込んできたキューバ危機は、その原因となったキューバ革命と、東西対立の中で建国された独自の社会主義国の実態についても、改めて興味と関心を抱かされることになった。

3．キューバ革命への道のり

キューバ人、とりわけ農民層が貧困に苦しむ一方で、キューバ国内の大資本家らが米企業と結託して国民の目を盗みながら資産を蓄え、贅沢三昧の生活を送っている現状を目の当たりにして、裕福な家庭に育ちながらもフィデル・カストロと弟のラウルは心を痛めていた。兄弟は資本家たちのしわ寄せを蒙った国民大多数の貧困、読み書きができない若者がぶらぶらしている未就学状態、そして医者にかかれない無医村の世界などから人々を救い出し、人並みの生活を営んで欲しいとの強い願いから飽くことのない希望を実現すべく行動を開始したのである。

革命の起点となった陸軍モンカダ兵営（現小学校）

この小さな「グランマ」号で亡命先のメキシコから母国の革命へ向かった

１９５３年７月26日（「M26」と呼ばれる革命の起点となった日）、カストロ兄弟率いる１６０名の兵士らが、密かにサンチアゴ・デ・クーバの陸軍モンカダ兵営を襲撃した。この奇襲は失敗してカストロらは逮捕され収監されたが、弁護士だったカストロは長々と自らを弁護する大演説をぶって後に保釈されることになった。

その後メキシコへ亡命したカストロらは、メキシコで知り合

ったアルゼンチン人のチェ・ゲバラをゲリラ仲間に加えて苦難のゲリラ闘争の末、その６年後外国や特定の組織から一切の支援を受けることなく、わが道を往く独自のキューバ式革命をやってのけたのである。

先ず、革命へのファースト・ステップは、１９５６年12月２日メキシコ亡命中のカストロ兄弟とメキシコで同志となったアルゼンチン人のチェ・ゲバラをリーダーに、Ｍ26のメンバーを加えた82人が革命を志して定員超過の小さな「グランマ」号でオリエンテ州ニケロ海岸へ上陸した時だった。不運にも諜報を得て待ち伏せしていた政府軍に狙い撃ちされ、多数の死者、逮捕者を出して現場から逃げおおせたのは、カストロ兄弟、ゲバラら革命の主役となった僅か12人だけだった。12人の革命戦士は近くの山岳地帯シェラ・マエストラへ逃げ込み、ジャングルでゲリラ戦を戦いながら苦節２年余の厳しい生活を送った。

続くセカンド・ステップは、１９５９年１月１日ジャングルを抜け出したチェ・ゲバラ率いる革命軍が、陸路を西方へ進軍しサンタクララの激戦に勝利を収めてフィデル・カストロと合流し、国民から熱狂的な歓呼を浴びながら首都ハバナへ凱旋した時だった。その前日流石に強気だった独裁者バティスタ大統領も敗北を悟り最早これまでと、トルヒーヨ大統領が独裁支配するドミニカ共和国へ亡命した。カストロ革命軍は首都ハバナを制圧し、勝利宣言をしてカストロが首相に就任した２月17日を期して、革命政権は正式に樹立された。ここに長いゲリラ闘争と亡命生活の末に、キューバは革命を成し遂げることができた。暗中模索の中を新しい独自の社会主義国家へ向けて第一歩を歩み出したのである。

1959年１月１日革命軍ハバナへ凱旋、「キューバ革命」成る

キューバ革命は、正に当時の国際社会にあっては青天の霹靂だった。よもや資本主義の大国アメリカの絶対的な支配権が及ぶカリブ海で社会主義革命が起きようとは、当のアメリカはもちろん社会主義国家ソ連も夢想だにしていなかった。キューバ革命は、それまでアメリカの言いなりになっていた他のラテン・アメリカ諸国にとっても天から降ってわいたような衝撃的な事件だった。それはやがて南米でも最貧国のひとつだったボリビアのゲリラ活動へゲバラが手を貸す導火線ともなって行った。

キューバは、アメリカの庭と言われるようにフロリダ半島から僅か１４５㎞の至近距離にある。アメリカは米西戦争に勝利を収めて以来長きに亘って独立国キューバを背後で操り、傀儡

政権となったキューバを実質的に支配した。アメリカはキューバを食い物にしていたアメリカ大企業や資本家を通してキューバ経済を自在に管理し、キューバ経済を思いのまま操っていた。それまで経済的にキューバから巨額の利益を吸い上げてきたアメリカとしては、それが無に帰するキューバの社会主義化は断じて許し難い事件だった。キューバ革命政権の存在は、喉元に匕首を突き付けられたアメリカにとっては目の上のタンコブと言えた。それまでキューバ国民の貧しい生活を横目にキューバ国内で散々甘い汁を吸っていたアメリカ人大資本家たちは、革命政府が進める社会主義的農地改革により農地や資産を接収され、思いもかけず奈落の底へ突き落される屈辱を味わされた。アメリカにとっては経済的にも、安全保障上も容易ならぬ状況を否が応でも受け入れざるを得ない事態に陥ったと言える。

アメリカにとっては大いなる誤算であり、屈辱であった。この時からアメリカのキューバに対する執拗な干渉が始まり、これは２０１５年の国交回復まで続いた両国にとって長い没交渉の始まりとなった。

同時に、アメリカと対立するソ連にとっては、小さな国とは言えキューバが同じ社会主義国家として誕生したことは、アメリカのお膝元に橋頭堡を確保することになり、ほくそ笑む事態となった。

４．社会主義国家建設とキューバ危機

革命以後もキューバは、アメリカ政府やアメリカ中央情報局（ＣＩＡ）に唆されたキューバ人反革命分子や一部のアメリカ人によるテロや、クーデターまがいの反革命的行為などの危機に度々脅かされてきた。だが、キューバ革命政府は、そんな反革命的なムードの中でも毅然として革命の理念と政策を、国の隅々に行き渡せるための具体的な基本政策を実行して行った。

キューバ政府の為すべきことは、先ず革命前に国民に約束したいくつかの宿題をクリアすることであった。次いで国家経済を立て直すために経済復興計画を立案し、実行することである。それは同時に、国家発展のために重要な国内のインフラ整備に取り組むことでもある。

フィデル・カストロが、敢えて恵まれた生活環境を捨ててまでしても、国家と人心の改革に胸を焦がしたのは、日ごろ目に

ゲバラ事務所（上）と事務所から望むハバナ市街

する人々の貧しさ、無知無学、無医村状態などを何とか解決しないと自らが生まれ育ったキューバに未来はないと考えたからである。その考えは山中でゲリラ活動をしていた時に益々強まり、後年これこそがキューバ革命の原点となり、力ともなった。

革命後ゲバラは自らが発行した革命軍機関誌に「マルクスが予見した法則を成就するだけだ」と提唱し、カストロも現実にはキューバを改革するためには、マルクス的社会主義理論を実践に移す以外に道はないと考えるに至った。

革命後まもなく１９６０年２月、ソ連のミコヤン副首相がハバナを訪問して２国間通商条約に調印した。キューバ革命によって社会主義国家体制に移行したキューバは、ただ盲目的にフルシチョフ時代のソ連型共産国家や、毛沢東の中央集権的な中華人民共和国路線を目指したわけではない。先ずキューバ革命政府は、それまで国内のほとんどの農産物と果物の生産・販売の権利を独占的に有していたアメリカのユナイテッド・フルーツ社の資産を接収した。同時に、同じアメリカ資本系列石油精製会社のテキサコを含む３社が、本国国務省の意向を汲んでソ連から輸入したソ連原油の精製を拒んだために、キューバ政府はそれらの製油所へ介入した。60年８月にはこれら３社と、同じくアメリカ資本の製糖工場、電力会社、電話会社、ニッケル企業なども国有化した。こうしてひたすら前進する革命政府は、アメリカ資本企業の接収を次々と実行し、同年10月にはアメリカ系資本のみならず、すべての銀行、キューバ地場の民間企業３８２社も国有化した。こうしてキューバ革命政権は、マルクス社会主義の理想を追うかのように、92年憲法を改正して自国を正式に「社会主義国家」と定義づけ、一途に社会主義路線を突き進んで行った。

しかしながら、アメリカとの国交断絶による影響は殊のほか深刻で、重工業などの停滞による経済力の低下は明らかだった。工業大臣に就任したゲバラは、自ら率先して交渉の使節として支援を求めて海外視察の長い旅に出た。その間に産業振興により諸外国との通商貿易を拡大し、加えて新たな地場産業、農業の育成と振興にも注意を傾けなければならなかった。

革命後ＣＩＡやアメリカと関係深い外国などからの干渉も頻繁になり反革命的事件も度々発生し、革命政権を揺るがしかねない危機が再三ならず起きた。

その第一弾が、61年４月ＣＩＡに支援された亡命キューバ人

世界遺産モロ要塞（遥かにハバナ市内を眺望）

革命広場の内務省壁ゲバラのモザイク画

による「ピッグス湾事件」(ヒロン浜侵攻とも呼ばれる)だった。
しかし、アメリカの支援を受けた反革命軍はキューバ軍に撃退され、更にキューバにとって幸運だったことは、陰で反革命軍への支援を約束していた米軍機が飛来して来なかったことだった。結局反革命は失敗に終わった。そんな苦悩の末に、事件直後の61年5月キューバは社会主義革命を宣言して、ソ連、及び東ヨーロッパ社会主義諸国との外交・連帯関係を強化した。
これら一連の革命政府による社会主義体制の構築は、益々アメリカ政府に疑心暗鬼の気持ちを抱かせ、アメリカは今や目障りとなったカリブ海の小国キューバを何とか排除、抹殺することを真剣に考えるようになった。背後で反カストロ・グループを支援しながら言葉巧みに反革命テロを唆せ煽っていた。
そんな緊張感が増す中を、62年10月唐突にアメリカ海軍艇がソ連のミサイル積載艦に対して包囲網を敷き、手荒にも海上封鎖を行った。これこそ世界を揺るがせた「キューバ危機」勃発である。一触即発の緊張感は13日間に亘って続いた。
最終的にフルシチョフ・ソ連首相が、同盟国キューバ政府の頭越しに直接ケネディ米大統領にキューバ国内からのミサイル撤去を約束して、アメリカ海軍艦艇は海上封鎖を解いた。ひとまず戦火の危機は去った。このように緊急事態発生の渦中でも、当事者キューバの立場が慮られることはなく、東西冷戦の狭間の中で対立する2大国・米ソの都合と駆け引きによってキューバ危機は発生し、回避されたのである。だが、このソ連の背信的行為がその後キューバ政府にソ連への不信感を募らせることになった。こうして重大な危機に再三見舞われながらもキューバは、幸いにして何とかこの危機を乗り切ることができた。
いずれにせよ一時的に国の土台は揺らぎかけたが、米ソ対立の嵐の渦中でキューバ革命政府は辛うじて国家破滅の危機を乗り切ることができた。
しかしながら、再三アメリカに緊張と危機感を味わされたキューバは、タカ派のレーガン大統領が就任した時、全キューバ中で定期的に兵士や学生まで交えた軍事演習を始めた。現在も国交こそ回復したが、今以てアメリカへの警戒心が拭えないキューバはいざという時に備えているのである。
社会主義革命を成し遂げたソ連や中国は、建国前に目指したマルクス・レーニン主義路線からやゝ逸脱し国家の混乱期を経て、今日では理想から大きく乖離し、現実には真の社会主義とは別の道を歩んでいるような印象を与え、社会主義とは名ばかりで国家の形態は形骸化している。巷には失業者が見られ、貧富の格差も生じ、農村は貧しく、指導部の権力一極集中により言論と思想の自由は抑圧されている。これら社会主義革命を成し遂げた先達の国々に比べれば、小国キューバは社会のインフラ整備や産業振興、国民生活の向上面などで立ち遅れているとは言え、先達の悪しき実態を反面教師にして、独立自尊、一歩一歩理想の社会主義国家建設へ向けて着実に前進している。

5．カストロとゲバラが国民に約束したこと

偉大な革命家フィデル・カストロとチェ・ゲバラらの革命及びゲリラ活動への情熱、2人が国民にごく当たり前の生活を送らせたいとの願い、そして自分たちだけが豊かな生活を送ることを潔しとしない無私無欲などが多くの国民に共感を呼び、革

命を成し遂げることができたと言える。

革命後半世紀余が経過し、また戦士ゲバラが世を去った今も、２人の英雄に対する全キューバ国民の想いと敬愛の念は強まることこそあれ、弱まることはない。この度キューバを訪れる前までは、何故２人が今日これほどまでにキューバ国民に慕われ、敬愛されているのか頭では中々理解できなかった。だが、今ではキューバの人々の心情を多少なりとも斟酌できるようになったと思っている。

ビランにあるカストロ兄弟の生家（現博物館）

キューバでは今でも革命戦士を個人崇拝の対象とすることや、偶像化することを国家として認めず、銅像を公共の場に設置することを法律によって固く禁じている。英雄であるカストロのモニュメントや画像は国中どこを探しても見つけることはできない。それほどカストロは自らが偶像化されることを潔しとしなかった。その点が過去に他所で国家を転覆させるような偉大な革命を成し遂げたヒーローたちとは、大きく異なる点である。母国のためにかくも偉大な功績を挙げたカストロでさえ、今では政治の表舞台から身を退き、ひとりの国民としてつつましい生活を送ることを優先させている。それはカストロが、個人崇拝や人間偶像化が決して国家・国民のためにならないことを知り過ぎるほど知っているからである。

カストロとゲバラが、革命前とその最中に常々気持ちの中にわだかまっていたのは、どうしたら多くの貧しい小作農民や、文字も読めない国民にごく普通の人間らしい生活を送らせてあげられるかというただその一念だった。病に罹ってもお金がなく、医者にもかかれない人々にどうすれば医療を施してあげられるだろうかということで頭がいっぱいだったのである。

アルゼンチンから身ひとつで革命に加わった医師のチェ・ゲバラにしても、国では比較的裕福な家庭に育ったが、所詮キューバでは外国人であり、キューバで左うちわの生活をしようとは考えていなかった。一方、フィデルとラウルのカストロ兄弟もまたビランの裕福な農場主だった家庭で何不自由なく育てられた。だが、彼らは安易に享楽する世間の道楽息子とはまったく別の世界観を持っていた。

自らの身を正してこそ国民が慕って付いてくるものだということを、キューバ革命の戦士たちは身体で理解し、その行動において清廉潔癖な模範を示していた。ハバナ市内の革命広場に何人もの大きなモザイク壁画を見ることができるが、彼らはキューバ独立のために志半ばにして亡くなった義士たちである。カストロの銅像やカストロ通りなどは、キューバ中どこを探し

ても目にすることはない。

革命政権は、まず国民と交わした社会主義的約束ごとを一日も早く実行することを最優先課題とした。それは、①農地改革実施、②義務教育と福利厚生サービスの拡充、③自由選挙実施、④民主政権樹立、⑤基本的人権の確保、であった。

真っ先に行った改革は①農地改革だった。これはゲリラ活動中に農民たちに最初に約束したことだった。農村人口は全人口の45％を占めていたが、革命前はほんの１・５％の地主が土地の46％を所有する寡占状態にあって、小作人農家は食べていくのにも困る有様だった。ほとんどの農民は失業か、半失業の状態だった。革命後、ゲバラは先ず大地主から彼らの農地を無償で接収し、農民たちへ無償配分すべきことを主張した。一農家に26ヘクタールの土地を与え、20万人の農民がその恩恵に浴した。また、働き場所がなく貧しい人たちを対象に毎日街中で廉価の食事配給制度も行った。

引き続きその他の課題も次々に実施に移して行った。その中でもカストロらが革命前から憂慮していたのは、②義務教育制度の導入と福利厚生サービスの拡充だった。以前から将来を背負って立つべき若者の多くが文字の読み書きすらできないことが気になっていた。一日も早く国民皆教育制度を実施することは喫緊の課題だった。また、病に罹っても貧困のために治療も受けられず多くの若者が亡くなる現実にも、ゲバラは医師として心を痛めていた。気になっていた貧しい人々ばかりでなく、すべての国民に対して医療サービスの幅広い提供ができるだけ早く実施されることが求められた。

幸い革命政府はこの大きな課題を最優先にほぼやり遂げることができた。キューバは現在国民に対して等しく教育費無償の義務教育制度と医療費の完全無料制度を実施している。

因みに「対ＧＤＰ公的教育支出割合」（２０１４年）は、日本の３・８％に対して、キューバのそれは何と12・８％でその教育投資額は世界でも抜きん出たレベルにある。かつて革命前には識字率が76％で文字を読めない国民が多かったが、今では15歳以上の識字率は99・８％に達し、ラテン・アメリカ諸国の間では断然トップ水準にある。今日キューバでは文字を読み書きできない人はほとんど見られなくなった。

医療分野においても人口１万人当たり医師の割合は、日本の23・０％に対してキューバは67・２％に上り、日本の約３倍の医師がいることになり、彼らが国民の健康をしっかり守っている。

更に医師の数において余裕のあるキューバでは、医師をベネズエラを始めとして同じラテン・アメリカの国々へ派遣して、医療支援を行いながら同時に貴重な外貨も稼ぐほど医療体制は整備されているのである。更に医療制度をむやみに破たんさせないための防止策にも知恵を絞っている。例えば、外国人がキューバで医療サービスを受ける場合、当然その外国人は医療費を支払わなければならない。だが、医療費を支払わないまま出国するケースを想定し、未払い防止のためにキューバへ入国するすべての外国人に対して、旅行傷害保険加入を義務付けていることである。

カストロらは、度々ＣＩＡなどに唆された反革命の動きがある中で、身に危険を感じながらも敢えて必要以上に権力を拡大、行使することなく、ゲリラ活動時代の純粋な気持ちを失わず、

底辺の貧しい人たちに気を配り国民の生活水準向上に常に目を向けてきた。これこそが今日カストロ兄弟やゲバラに対して国民が尊敬し、絶大な信頼を寄せている由縁である。

キューバ革命が他国の革命、或いはクーデターと大きく異なる特徴は、ゲリラ活動による資本家支配体制を打倒し、その過程で国民、とりわけ貧しい人々に約束したことを革命後に確実に実行していることである。それはまぎれもなくリーダーであるカストロとゲバラの強い信念、行動力、そして高潔な人格に基づくものである。

６．カストロとゲバラの友情と協調

カストロとゲバラの友情溢れるグラビア誌

フィデル・カストロの国民を貧しい生活から救いたいとのストイックでありながら、強い意志と熱意に共鳴したゲバラは、カストロを助けてゲリラ最前戦で戦い抜き、ともにキューバ革命を成功に導いて行った。

「両雄並び立たず」と俗っぽく言われるが、革命前とその後において優れた文筆家であり、雄弁家でもあった２人は互いに立場を違えながらも自らの思想と意志を優先させ、それぞれ異なる分野で力を発揮した。戦略家であるカストロは作戦立案を、ゲバラは現場でゲリラ活動を指導・指揮していた。お互いの役割分担を理解、認識して業務を分かち合ってでき得る限り最善の行動を行っていたのである。その意味では、心の中で信頼し合っていた２人は持ちつ持たれつの関係にあったということができる。一部にはライバルの２人はそりが合わなかったとか、カストロが権力行使のためには戦友ゲバラが煙たくて特使の名で外国へ長期出張させてゲバラを遠ざけたとか、挙句には最終的にボリビアでゲバラが処刑される運命に追い込んだのはカストロだと２人の対立を煽るような無責任な情報も耳にする。

しかし、２人に関して現地でエピソードなどを仄聞する限り、噂話はどう考えても２人に対する意図的な悪意や中傷で、とても好意的であるとは思えない。

その中で、今年放映されたＮＨＫ・ＢＳ「世界のドキュメンタリー」のフランス作品「カストロ対ゲバラ」は、率直に言って２人の関係を友好的に描いているとは言い難い。キューバの人々の２人に対する尊敬心と信頼感を見落とし、彼らの気持ちからかけ離れた立場に立って制作されている。タイトルに「対」という語を用いたこと自体、明らかにカストロとゲバラをお互

いにライバルとの視点で捉えている。冒頭で歴史学者サイモン・リード・ヘンリーは、カストロは「国家」と「権力」を、ゲバラは「世界革命」と「未来の選択」に拘っていたと述べ、この

沈痛な表情で同志ゲバラの死を公表するカストロ

２人が意志を共有することは元々平行線だったと解説している。だが、それが反って２人の力の原動力となって機能していたと評価しつゝも、２人はあくまで対立関係にあったと主張していた。しかし、カストロには「国家」と「権力」より、「国民に人並みの生活」と「無私無欲」に強く拘っていた。その点では、ゲバラの「世界革命」と「未来の選択」とは何ら対立するものでも、平行線上にあるものでもない。

カストロのゲバラに対する友情と信頼は通り一遍のものではなかった。カストロは自著「ゲバラの記憶」の中で「私はいまでもチェの夢を見る」と同志ゲバラを想い、67年10月18日開催されたゲバラ追悼集会では、ゲバラから受け取った遺書とも言える最後の手紙を涙ながらに読み上げ、国民の前にゲバラへのありったけの友情と親愛の心情を吐露して、ゲバラの行動力と人間性に敬意を表し称賛した。ゲバラとともに行動した11年の間に溜まったほとばしる感情と哀悼の気持ちを一気に吐き出したのである。ゲバラは手紙の中で「よその国の空の下で私に最後の時がやって来たら、考えることはこの国の人々のことであり、特にフィデル、あなたについてでしょう」と結んでいる。

個性的な性格で論争好きな２人が議論を交わせば激しいやり取りになるのはむしろ当然である。カストロとゲバラの論争は決して仲違いではなく、会えば互いに長い時間をかけ夜を徹して、理解し合えるまで徹底的に激論し合ったものである。それほど２人は議論を好む雄弁家だった。敢えて言えば、ゲバラには革命後キューバ国籍こそ与えられたが、その当時は少なからずキューバにあっては自分はよそ者であるとの負い目があったことは間違いない。それは、ゲバラが中南米をラテン・アメリ

カという国境のないひとつの国家に造り上げることを大きな理想と考えていたためと、その理想的な目標達成までは国家同士が決めた国境や国籍というものに心情的に引っかかるものがあったからではないかと考えられる。

革命後リーダー・カストロは、まだ生まれたばかりでホヤホヤの革命政権国家には、積極的な国家発展の舵取りのためには国内に強力な政治基盤を固める必要があると考え、その一方で外国から支援、協力を得るために信頼できる人物を外国へ派遣し友好の絆を結ぶことが重要だと判断し、ゲバラもまたカストロの意を体して度々外国を訪問した。

確かに世にカストロ及びゲバラ信奉者ばかりがいるわけではない。そこにはアンチ・カストロ、或いはアンチ・ゲバラの観点から、必ずしもキューバ革命、及び革命戦士を好意的に評価する声ばかりがあるわけではない。だが、キューバ国内では２人の珍しいほどの友情と親愛関係について耳にすることこそあれど、２人の不仲を聞くことはない。ハバナ市内の書店で買い求めた前々頁のA4版アルバム集〈CHE and FIDEL〉には、全編全頁に亘って２人の親密さと相互信頼が満ち溢れていることからもそれは想像がつく。

ことキューバ革命に限れば、カストロとゲバラの２人が１つのユニットになってお互いに力を合せたからこそ、ラテン・アメリカにおいて初めて社会主義革命が成し遂げられたと言える。

7．厄介なグアンタナモ米軍基地

スペイン統治時代から、米西戦争を経て独立した後、当時のキューバはアメリカの支援によって独立できたというアメリカへの感謝の反面、アメリカに対する負い目からアメリカにグアンタナモ基地永久租借権を認めざるを得なかった。ラテン・アメリカ諸国やカリブ海諸国に支配と影響力を及ぼし、自国の思い通りに権益を行使するためにグアンタナモ基地確保は、アメリカにとって当然とも言える要求だった。革命後しばらくグアンタナモのアメリカ軍基地の周囲には、キューバによって地雷が埋設されていた。地雷埋設は基地関係者のみならず、地元民にも市内と基地との往来を不可能にさせた。そのような緊迫した状態の中で、キューバ政府は引き続きアメリカに対して強く米軍基地返還を求めた。

洒落た建物のグアンタナモ市内を走りまわる人力車

それでも基地の重要性を認識しているアメリカには、基地返還の気持ちなど毛頭なかった。こうして基地はキューバ国内にありながら現実はアメリカ合衆国の一部のような状態と化して、周囲にはキューバ国民でさえ一切近づくことができない異常な緊張状態が続いている。

その後キューバは新たに報復的な手を打った。基地の孤立化を狙い基地内への飲料水を含むすべての水分

供給を停止したのである。しかし、これも米軍基地では海水の淡水化により急場を凌いた。基地内のアメリカ軍人、軍属及び家族は基地外へ出ることを禁止され、地元グアンタナモ市民との交流は一切なく、米軍基地はアメリカとの直行空海路だけの狭いチャンネルでしかなくなった。それでも基地内には役所、学校、警察、消防、教会、商店、囚人収容所、その他ありとあらゆる設備が整えられ、閉鎖的で小さな独立国家まがいの存在となって、キューバ人の独立国としての対面とプライドを傷つけたまま今日に至っている。

蛇足ながら、そんな厳しい基地の街・グアンタナモ地方は、本来おっとりとした田舎風の土地柄で、昔から美人の多い土地として知られ、今でも市内にはスペイン時代の歴史的な建造物が数多く残され、多くの人力車や馬車が走りまわっている。グアンタナモを一躍有名にした、キューバン・ミュージック♪**グアンタナメーラ♪**（グアンタナモの美人娘の意）は、世界中に１５０以上ものバージョンのあるポピュラー曲である。この曲は歌詞のオリジナルをスペインから独立前に殉死した救国の志士、国民的英雄詩人のホセ・マルティの「素朴な詩」から引用していることからも国民の気持ちを一層惹き寄せている。

アメリカはグアンタナモ基地がキューバ国内にありながら、キューバの法律が及ばない治外法権を逆手に取り、密かに外国人捕虜に対する過酷な拷問などの非人道的な行為を行い、それが最近まで見逃されてきた。だが、９・11同時多発テロ後のアフガニスタン侵攻やイラク戦争の捕虜らを隔離収容して、人種差別と過酷な拷問を行った様子が映像で世界に流され、国際的にアメリカに対する厳しい非難の声が高まった。この恐ろしい事実がグアンタナモの名を世界的に悪名高くして純朴なキューバ人をひどく悲しませている。

キューバ政府は、アメリカに対して永久租借権を認めず引き続き返還を求めているが、ラテン・アメリカ圏に影響力を強めたいアメリカとしては、グアンタナモ基地の重要性がより一層増してきた今日、長らく国交断絶した反米国家キューバへの足掛かりとして基地を手放す気持ちはまったく見られない。キューバが受け取りを拒否しながらもアメリカは、沖縄・嘉手納米軍基地の約６倍の広さを誇る面積１１６㎢という広大な土地に対して、年間高々４０００ドルばかりの安い賃借料を支払い続けるだけで基地返還の意志はまったく示していない。

米軍基地が展望できない「米軍基地展望台」

サンチアゴ・デ・クーバからコロンブスが上陸した地バラコアへ向かう途次、私はこのグアンタナモで、何とかして問題の米軍基地を覗いてみたいと願っていた。だが、残念ながら基地周辺へ近づくことは許

されなかった。そこから少し離れた小高い丘の上に遥かに基地が望める筈の米軍基地展望台があるが、それは「看板に偽りあり」の「米軍基地が展望できない米軍基地展望台」だった。

昨年キューバを訪問したオバマ米大統領は、一度はこのグアンタナモ基地内の収容所閉鎖に言及したが、共和党の強硬な反対で空手形に終わってしまった。半世紀以上に亘って両国間の外交関係が閉ざされ、昨年漸く両国の国交は回復したが、両国間の懸案事項となっているグアンタナモ基地租借問題はその後も燻り続けてまったく進展していない。両国間の永遠の課題となってしまうのだろうか。

夕涼みするバラコアの家族

革命から半世紀余を経て、今では革命の戦士たちはほとんど新生キューバの要職から去った。戦士のひとり、フィデル・カストロの弟ラウルも、２０１８年には国家評議会議長の座から退くことを公表している。果たして革命戦士の後継者たちが先輩たちの思いや志を継いで、山積する懸案事項にどのような具体策を提示してアメリカと交渉し、解決の道を探ることができるのだろうか。重い課題である。

８．ハバナ街頭風景からキューバを分析

長い間革命のために戦い、革命後は国家体制の整備と経済発展計画の立案と実施に追われていたために、率直に言ってキューバは半世紀以上も世界から取り残されることになってしまった。しかし、昨年長い間断絶していたアメリカとの国交が復活したのを手始めに、今世界の多くの国々と外交関係の締結、復交を模索している。

現在のキューバは、革命の中心であった90歳のフィデル・カストロは引退したが、その志を引き継いだ同じ革命戦士の弟、85歳のラウル・カストロ議長以下国家のリーダーの揺るがぬ信

深夜に長い行列ができるハバナ空港の両替所

日が落ちると暗くなるハバナ市内

念で、大きな試練を乗り越えようとしている。キューバが漸進的に発展している実態を身を以て知る国民は、国の指導者を信じてこれからも堅実な発展を期してともに歩んで行こうとしているところである。

ハバナ市内の狭い路地には昔ながらのレンガ造りのコロニアル風ビルが建ち並び、そこにはスペイン統治時代のノスタルジアとそこはかとない風情が漂っている。１９５０年代に生産されたアメリカ製乗用車、通称「アメ車」（取り付けられたエンジンは日本製が多い）が走りまわるハバナ市内は、世界遺産にも登録されている。かつてノーベル賞作家アーネスト・ヘミングウェイが滞在した定宿（ホテル・アンボス・ムンドス）や、入り浸ったレストラン・バー（ラ・ボデギータ・デル・メディア）も店内に彼の写真やサインを展示して人気を呼び、観光スポットのひとつとなっている。

街を歩いていて何気なく気になったのは、首都ハバナを始め、地方都市の市街地が一部の特別な広場などを除いて、日没が近づくころになると、街の路地裏や都市全体からやゝ薄暗い印象を受けることである。これは夜間になると已むに已まれぬ逼迫した電力事情のせいで、無駄な電力を節約しているからである。キューバの電源はほぼ百％近くが火力発電によるものであるが、その消費原油は国内で産出されず、ソ連崩壊前はソ連から安い原油を融通してもらい凌いでいた。現在はベネズエラから相場の国際価格で買い入れている。

かつて私自身嫌な思い出として体験したことであるが、街中で不意に強盗などに襲われるような不安が、キューバではさほ

情緒漂うハバナ旧市街

ヘミングウェイが通ったバー（上）とアメ車

ど感じられないことで外国人旅行者が安心して歩けるという点からも、観光都市として必要最低限の条件を備えている。

キューバの経済力は少しずつ確実に上向いている。教育の普及によりモラルの向上もそこここに見られるようになった。社会構造は定着し、社会主義的制度が普及し機能して、今や模範的な社会主義国家への道を堅実に歩んでいる。

現在はまだ遅々としてはいるが、総括的にはキューバ型社会主義国家建設の過程で、国造りの土台となる基本的な国民へのサービスと、国民の国家への奉仕を相乗的に発展させ、時間をかけて大きな夢であるマルクス社会主義国家建設へ向けて国民がともに歩んでいる様子が看て取れる。

９．社会主義国家キューバの将来像

19世紀には単なる発展途上国のひとつにしか過ぎなかった小国キューバが、革命以後革命戦士のリーダーシップによる巧みな国家運営の舵取りと、国民の指導者への信頼と愛国心に基づく国造りによって、貧しいながらも堅実に社会主義国家建設への道を歩んできた。今日キューバ国民は他のラテン・アメリカ諸国に先駆けて底辺の貧困、学童の未就学状態と無医村世界から脱出することができた。全国民が生きていくうえで求められる人間らしい自由な生活が、最低限保証されるようになったのである。これによって国民は、まず安心して働き、生活することができるようになった。

しかし、漸く革命を成し遂げたキューバではあるが、革命後は「前門の虎・後門の狼」とも言うべき、社会主義・共産主義を目の敵にする帝国主義の申し子アメリカ政府と、アメリカ資本主義の高圧的な権力行使と妨害行為に度々悩まされ、耐えて行かなければならなかった。

革命後国内には革命政権に対する不満の声はほとんどなく、革命によって財産を接収された大資本家や、反革命のレッテルを貼られたアメリカへの亡命者、アメリカに唆された反革命分子らが、アメリカで逆恨みの末に「カストロ独裁政権打倒」の反革命的デモがしばしば企てられたが、所詮それはキューバ国民の本音から遊離したごまめの歯ぎしりにしか過ぎなかった。

キューバの発展計画の道のりは険しく、それは今日もなお続いている。経済発展計画と実施面では、恰もけもの道に迷い込んだかの如くである。国内事情もさることながら、より以上に国際情勢に左右されることが多かったからである。

最大の経済的危機は、革命直後の１９６１年国交断絶に伴うアメリカによる経済封鎖だった。２度目の危機は、その後の苦しい時に手を差し伸べてくれたソ連が、91年ソビエト連邦崩壊により大幅な国家援助の切り捨てを通告してきた時だった。それに伴う社会主義国の経済相互援助会議（コメコン）のような扶助的同盟解体も大きな痛手となった。コメコン内での国際分業体制は、主要産業製品が少なかった革命後のキューバに幸運をもたらしていた。89年には、砂糖、ニッケル、柑橘類だけで全輸出額の83・1％をコメコン加盟国へ依存していた。それは、革命の年、59年水準の10倍以上の数値に達した。それらの相当部分が失われてしまったのである。社会主義圏市場が姿を消したことは、直ちにキューバ経済に深刻な影響を及ぼした。国内総生産（ＧＤＰ）は、89年から93年まで僅かな間に35・1％

[別表]

キューバ国民総生産の推移

単位 百万ドル

年度	1970	1980	1990	2000	2010	2011	2012	2013	2014
GDP	5,693	19,913	28,645	30,566	64,328	69,511	73,139	77,150	82,775

も減少した。

それでもキューバ政府は財政的に国家存亡の危機を乗り切るために、新たに国家財政再建の手段として外貨獲得の目標を立て３つの特別措置を実行した。

それは、①外国投資の解放、②米ドルを主とする外貨の所持合法化、③観光振興だった。

これら特別措置の結果、94年にはキューバ経済はＧＤＰの急落に歯止めをかけ、財政的に持ち直し奇跡的に成長路線を回復することができたのである。

そして、近年キューバ独自の経済政策と経済発展のスピードは少しずつその効果を上げてきた。上記別表に示されている革命後10年毎と２０１０年以降のＧＤＰを比較してみれば、10年以降の発展の速いペースに驚くだろう。14年の１人当りＧＤＰは７２７４米ドルとなり、この数値はアジアのタイ、インド、ベトナム、フィリピンなどを上回るばかりか、中国の７６１７米ドルに肉薄するレベルにまで到達した。今後諸外国との通商を拡大し貿易量を増大することによってキューバには明るい未来が開けてくるものと確信している。あれもこれもこれまでカストロ兄弟やゲバラら革命戦士が道を開き、マルクス社会主義思想を導入して社会・経済体制を整備し、堅実に国の将来計画を立てて社会主義国家を建設して国民が一丸となって努力を積み重ねて得られた成果である。まだまだキューバは前へ進まなければならない。だが、革命の結果キューバ国内には優秀な人材も育ち、その前途には曙光が見えている。

それでいてなお社会インフラは未整備で、鉄道などの未熟な交通インフラ、地方都市の道路未舗装などが足かせとなり都市再開発計画などは立ち遅れ、経済のビッグ・プロジェクトは充分活性化していない。その中で経済発展の基本計画のひとつとされた観光振興には明るい光が見えてきた。アメリカとの国交回復とともに、外国や国際機関から支援や投資を受けられることや、キューバの埋もれた魅力的な観光インフラがアメリカ人ら外国人観光客にアピールし、観光客が増えることなどによってこれからの経済開発、発展に大いに期待が持てることである。

10．キューバの旅で考えたこと

これまで私自身ひとりで彷徨った「海外武者修行」体験に照らしてキューバの旅で気づかされことがある。

旅をすることの最大の目的と楽しみは、見知らぬ土地を訪れて、その土地の多くの人々と触れ合い、彼らとその土地を知り、彼らの言語、生活、文化、風俗習慣、宗教などを知ることにある。特に、その土地の空気に触れ、匂い（臭い）をかいで生活臭を直接五感で感得することが大切である。それが臨場感である。そうすることによって、喩え地球の果てで起きた些細なこ

とでも大きな事件に発展する可能性を身体で感じ取ることができ、未来に起こり得る意外な出来事や事件すら予測することも可能となる。このように生活現場の最前線で感じられる臨場感こそが、日常生活の場でも、最も配慮されなければいけないと思っている。私たちの未来を予知することが可能な臨場感こそが、生きていくうえで最も大切な要件ではないかと考えている。それが、このキューバへの旅を決心した最大の理由である。

革命に関する写真展示や書籍が目につく

これまで戦争、内戦、動乱、テロ状態の国や戒厳令下の地域を含めて、アジア、アフリカ、中東、南米などの発展途上国を度々訪れ、軍隊によって身柄を拘束されるなど、再三危機一髪の危険に身を晒しながら現地で人々の生活現場に密着し、その実態を見てきた。

すでに記したように、学生時代にキューバ革命とキューバ危機に強い衝撃を受け、爾来これらに強い関心を抱いてきた。革命以後キューバが大きく変身して試行錯誤を重ねながらも社会主義国家を創り上げたことは、キューバにとって、またキューバ国民にとっても今日のキューバを見てみれば、あるべき理想の姿だったのだと思う。マルクス経済学を少しでもかじってみれば、社会主義思想をベースに最低限の生活を保障され自由と民主主義が担保された国家こそが、理想的であると考えることに異論はない。

今日では、かつてマルクス・レーニン主義を嘯いていたソ連を始め、ソ連へ右へ倣えの似非社会主義国はすべて崩壊した。

実際東西対立が激しかった時代に、「鉄のカーテン」ソ連、毛沢東主導の共産国家・中国、秘密警察監視下の東ドイツ、チャウシェスク独裁体制下のルーマニアなどいわゆる模範的な社会主義国家と言われていた国々を訪れては、油断のならない緊張感に随分神経をそば立たせられたものだった。一方これら過去の帝国主義的社会主義国家とは異なり、偶像崇拝や過大な権力志向と行使を嫌い、つつましく生きる社会主義国キューバでは、旅行者は安心して気兼ねなく市内を歩きまわることができる。ここには自由と平等、そして社会主義的民主主義がある。そこに私はマルクス社会主義を自由、かつ平和裏に巧みに実践している社会主義国家キューバの溌剌とした姿を見たのである。

この小さな国には自ずから「真実」と「自由な空気」があり、現実のありのままの姿を見聞することができる。現場を見ることなしに真実を知ることはできないし、将来を予想することも

できないことを確認することができたと思っている。
　そんな気持ちを抱いてこの度革命の地・キューバを訪れ、自分の目で見て、自分の耳で聞き、自分の手足で触れた体験を、僭越ながら少しでもキューバの実態を知ってもらいたいと願い、ここに個人的、かつ独断的な拙い感想を綴った。
　この短い旅を通してどれほど臨場感でキューバを知り得たかは何とも言えない。だが、国を導くリーダーの信念とリーダーシップによって、かくも大きく国を変えられることを知ったことは大きな収穫だった。
　今日キューバの実態はわが国にあまり伝えられているとは言い難い。果たして革命戦士のフィデル・カストロやチェ・ゲバラがそれぞれ２度も日本を訪れていることを知っている日本人がどれほどいるだろうか。ゲバラ訪日の折日本政府は当時アメリカがキューバに対し国交断絶をしていた外交的立場からアメリカに配慮して、ゲバラらに対してあまり誠意を尽くした対応をしなかった。況やゲバラの広島原爆被災者慰霊碑参拝の希望に対しては積極的に応じず、ゲバラは駐日大使とともに個人的に広島を訪れざるを得なかったことなどはその典型である。
　日本との貿易額も１９７５年の２３１１億円を最高に、昨２０１５年には僅か67億円と大幅に減少した。過去におけるキューバの対日債務が積もり積もったこともその一因であるが、その取扱額シェアはアジアでは中国、ベトナム、韓国などにも及ばない。今年９月キューバを訪問した安倍首相は、１８００億円の対キューバ累積債権額のうち、１２００億円を免除し、政府開発援助（ＯＤＡ）拡充をキューバ政府に約束した。それに伴ってこれから日本・キューバの通商も再び拡大の方向へ向かうことが期待される。アメリカの経済制裁も一部解除されたことにより、キューバの経済復興も加速されることだろう。
　今キューバでは、国民が更なる国家の発展を目指して第２の国造りに力を注いでいる。国中にカストロ兄弟や、チェ・ゲバラら革命戦士たちへの感謝と敬愛の気持ちが溢れていることが旅行者にもひしひしと感じられ、その純粋さに心を打たれる。国民にとってもこのように尊敬できる国家の創設者を持てたことは幸せなことだと思う。
　キューバが小なりと言えども、世界の大国に立ち向かって自らの矜持を抱いて信念を貫き、国民が最低限の生活を営める唯一無二の社会主義国家を創建したことに敬意を表したい。キューバが未来永劫に発展されるよう願わずにはいられない。
　この機会にキューバの人たちと話し、キューバの事物を見て、キューバの土地の空気に触れ、断片的ながらもこの国を知り得たことがこの上なく心に訴えた。キューバ革命は、ロシア革命にも優る20世紀の偉業だと思う。これを成し遂げた、人間味あふれるカストロ兄弟とチェ・ゲバラらの愛国心と人間性を知り、彼らに対する尊敬の念が一層高まった。この機にキューバを訪れることができて本当に幸運だったとつくづく感じ入っている。
　もし許されるなら、半世紀前に戻ってあの時代にキューバの人々とともに、「キューバ革命」と「キューバ危機」の臨場感を味わえれば、申し分なかったのではないかと思っている。

（日本ペンクラブ会員）

［本レポートを脱稿した11月26日、フィデル・カストロの訃報を知った。心よりご冥福をお祈りしたい。合掌］